

1. 研究の目的

別珍の布地は、衣服として実際に着用してみると、いわゆる「白っぽく光る」という現象をおこす。この現象をおこした場合は、外観をそこね、用途によっては使用しえなくなることがある。これは服飾に関係するものとして、絶対に見過すことのできない現象であると考え、この原因を探求し、消費科学的立場で検討を加えることもいささか意義あることと考え、光学機器を用い、光沢を測定、これにより「白っぽく光る」現象をとらえようとしたわけである。

2. 方 法

一般に市販されている別珍の布地、2種を選び、タイトスカートを作成、これを体形、体重、通学状態等が相似すると思われる学生に着用させ、各々着用日数毎に、摩擦部分を、ゲルツの光沢計を用いて光沢の度合いを求めた。

3. 成 果

試験の結果、着用日数と正反射光線の大小とは相対的關係は余り認められず、むしろ着用日数そのものよりも、着用の仕方、動作等に大いに影響されるということが判明した。また、地組織が密でパイルの整列が密な、いわゆる上等の布地は、そうでないものに比べ「白っぽく光る」率が少ないことも判明した。